

## 第4分科会第1分散会

### 1. 報告内容と討議の概要

第1分散会では6本の報告をもとに討議を重ねた。

報告の内容は、「障がいのある子どもに関わって」地元長野県と千葉県から、「災害ボランティアに関わって」兵庫県から、「宗教界の差別について」新潟県から、「隣保館での活動について」高知県と三重県からと大別できた。これらの報告を受け、意見交換を行った。

分科会の討議の柱1にあるように、人権課題の解決のためには、まず「自己の社会的立場を自覚し、人権確立に主体的に関わろうとする個の存在」が不可欠だ。

兵庫県の報告では、報告者自身も被災しながら、被災者ボランティアとしての活動から、災害によって日常隠されていた差別や偏見に出会う。そんな中で、災害弱者としての女性の力を結集し、「寄り添う」「共感する」「傾聴する」ことを大切にし、弱者の視点、人権の視点を柱に据えた活動の様子が報告された。三重県の隣保館の指導員である報告者は、「自分は、過去に部落差別を受けた。ふるさとが嫌いな訳じゃないけど、差別があるからふるさとを語ることを嫌っていた。」と語り、過去の自分と同じように、県同教大会の地元報告に出るのを渋っている幼なじみに出会った。報告者が幼なじみに寄り添い、彼女が部落差別の中をたくましく生き抜いてきた地域の人々と出会い、その思いを仲間とつなぐ中で、自己の社会的立場を自覚するとともに、生きる自信や誇りをともに育んだ様子が報告された。

これらの報告や意見交換から討議の柱2の部落の子ども会や地域の活動の広がりにとって「自己の社会的立場を自覚した個」が、その思いを語り発信することで「同じ思いの人々との連帯」へと広がりをもった取り組みに結ばれていくことの大切さが共有された。

人権問題の解決をめざす関係機関・団体との連携に関する討議の柱3に沿って論議した。

長野県の報告から、不登校の自分の子どもを育てた経験を持つ報告者が、中間教室で不登校の子どもたちの「いきづらい、居場所のない学校」の訴えに寄り添い、支援に取り組む中で、在籍校や関係機関との連携を通じて「子どもたちが帰る価値ある学校なのか」を問いかけ、支える仲間づくりの取り組みに苦悩する姿が報告された。千葉県からは、ダウン症の自分の子どもに対する差別にあいながらも、家族の協力や、思いがけない理解者の存在に力をもらい、「障がいがあって何が悪い」と開き直り、障がいのある子どもを育てる親を結ぶ様子が報告された。教育行政に被差別の人々の声を粘り強く届ける中で、教育行政との連携を通して、講師派遣の枠組みや、受験の時の配慮制度の実施を成し遂げ、学びを取り戻した活動が報告された。その活動はやがて障がいのある子どもを持つ親の相談活動へと広がり、力強く取り組みを進めているという報告であった。

高知県の報告では、隣保館で学ぶ子どもたちを部落問題学習を中心につなぐとともに、他地区の子ども会との交流によるつなぎの様子も報告された。子どもたちが通う学校の教職員が報告者とともに分科会に参加し、補足発言する姿にも確かな「連携」の姿

が見られた。報告者は「自分にも差別心があると気づけたことを考えると、部落に生まれて良かった。」と語った。会場からも「自分も差別をする人間だという自覚が大切なのではないか」という主旨の発言があった。そのことに限った意見交換はできなかったが、会場内で共有できた内容だった。また、「関係機関・団体との連携」にとって極めて大切な要素の一つが「人と人とのつながり」であることも、再度確認された。

様々な関係機関・団体との連携については、各機関・団体がどのような考えに基づき、どのような取り組みをしているのかを具体的に共通理解をする必要がある。今回の分散会の6本の報告を見ても、関係機関・団体と幅広く豊かに連携しているという報告は少なかった。その意味では、今回、新潟県から「今までの因習や迷信を受け継いできた中で、私たち宗教者が差別に荷担していたのは紛れもない事実だ」と真摯に発言する同宗連からの報告があった。この宗教界からの報告によって、宗教界が人権問題についてどのような考えを持ち、どのような内容に、どのような組織で取り組もうとしているのかが明らかにされ、大変意味のあることだった。宗教界からの報告は今までも少なく、まだまだ連携とかを論ずるには至っていない。しかし、このような報告をきっかけに、まずはその機関や団体の取り組み等について知ることから連携は生まれる。

社会教育分野の実践の交流をさらに進め、より論議を深め、取り組みの深化を計るためには、マスコミ・企業・労働組合・行政などの報告も、積極的に掘り起こす努力を続けていくべきであろう。討議の柱6には「『人権教育・啓発法』の具体化」についても書かれているが、啓発の推進に関しては、行政関係からの報告も必要になると思われる。

## 2. 次年度につなぎたい課題

各報告を、分科会討議のどの柱で論議するか確定しようとしたが、どの柱にも合致しないと思われる報告があり苦労した。また、総括討論も、全ての報告に関わる柱立てをしての論議が難しかった。

論議の内容としては、「自分探しをし、居場所を探し、揺れている子どもたちや保護者の姿が、また、親を悲しませるから、差別発言を受けたことを黙っている被差別部落の若者の現実が報告された。そんな子どもたちや保護者に、私たちは寄り添えているのか。思いを受け止めようとしているのか。そんな現実を見ようとしているのか。私たちが『学ぶ』とはそんな子どもたちや保護者の「揺れ」に気づくことだった。そこから私たちの『変容』が生まれる。どこでどのように学び、変わることができたのかを、『自分自身の持つ差別性』とともに明らかにしたい。」という提起がなされたが、根本に据えるべき視点である。常にこの提起を基本に起き、今後も分科会論議を重ねたい。

## 第4分科会第2分散会

本分散会では、「差別の現実を語り合える関係性」「その関係性や子ども会活動・識字運動・啓発活動・学習活動の中で、差別を跳ね返していく学び」「差別を解決するための具体的な発信や働きかけ」をどのように構築しようとしているのかを柱に討議を進めた。また、「地域における教育」「災害・復興への支援」「住民を対象にした啓発」「行政に対する運動」と様々な視点で報告された5本のレポートをもとに討議を重ねた。

「誰ひとりとしてもれることのないまちをつくりたい」

「震災復興をきっかけに、部落に実際に通い、関わり、差別の現実を知った。そして、地域の人とつながることができた。その学びを勤務する学校の子どもたちに実際に活かすことができているのか。そんな関係をつくれているのか、しんどいことを聞ける自分、話したいと思える自分になれているのか。自分に問い直したい」

いつ出会うかわからない部落差別、いつ起こるかわからない災害、差別や災害は人間関係を崩壊させてしまう。だからこそ、地域コミュニティをつくる必要で、「この地域で生きるひとり」と自覚をもつことが、すべての人が生きやすいまちをつくることにつながる。

地域で生きる人が運動や取組を進め、その地域の力を高めていく。あるいは「そっとしておいて欲しい」という思いの裏にあるものを行政や学校がつかみとり、地域と連携する中で、その地域が高められていくこともある。

部落差別や台風・地震などの災害、一番しんどいこと、一番わかって欲しいことを聞ける、語り合える関係性がつくられているか、寄り添い、支え合い、ともに闘える自分になれているかどうか確認された。

「“子どもは一生懸命、解放運動に取り組む親の姿をみて、自分がここに生まれてきたことを幸せに思うようになる”という言葉が、自分の親と重なった」

「身内の結婚の際に部落差別と直面した。差別をなくすために歩みたい。啓発のあり方を見直したい。押しつけではなく、共感の啓発を進めたい」

「両親や祖父母が背負ってきたこと、その事実としっかり向きあっていきたい」

「部落出身であるということに向きあうことで、他の人権問題にも視野が広がった。同和教育は自分を豊かにする」

「教え子が結婚差別を受けた。彼女は立場を知らず、親も立場を伝えていない中で、一歩踏み出せなかった私がいる。“部落差別は地区外の人にも偏見や差別心をすり込まれることで差別者にしてしまう”という言葉と出会い、差別とわかっていながら一歩を越えられなかった自分自身に気づいた。教え子とともに一歩前に進みたいと思う」

「部落差別がある以上、関係ない人はいない。外に問題を押し付けている以上なくなならない。部落問題は自分の中にある差別心や偏見を打ち消していくこと。部落は自分だ」

「差別をする人がいる。でも、それをなくそうと横に立ってくれる人がいる」

「部落の人が先頭に立たなければ、部落差別は解決しない」

「差別的な行政の姿勢やおとなの意識が子どもたちに直結していかないように、学校現

場で子どもたちに関わる仲間がいる」

部落問題は自分の中にある差別心や偏見に向きあい、自分の生き方を問い直す内なる闘いである。差別の解決を当事者任せにするかしないかは、仲間としてつながれるかどうか。他人事で終わらせずに、自分の中に差別意識がないか問うことは、反差別の主体者としてともに歩む仲間としてつながっていくことであり、部落差別を解決していくスタートラインとなる。被差別・加差別という関係を越えて、反差別の主体者としての関係を構築していくことは差別解消へとつながる。

差別をしている人を恨んだり、否定したりすることでは解決されない。その人に、偏見や差別心を植え付けた部落差別が許せないからこそ、反差別の主体者として歩む。差別との闘いは、差別者を打ち負かすことではなく、粘り強く仲間をつくる、負けきらない強さとしなやかさをもった闘いであることが確認された。

「子どもたちは、地域や学校、行政など、様々な人の関わりの中で育っていく」

「もう一度、地域・学校・行政・運動・家庭が連携し、地域の子どもたちやそこで生きる人に、しっかり関わっていくことを定着させなければいけない」

「部落問題を薄めるのではなく、本当の意味で広げていくために、学校教育や社会教育の中で部落問題を中心に据えて取り組んでいるか、改めて問い直したい」

子どもの育ちに、その子のことを知っている地域や学校はもちろん行政や家庭を巻き込みながら、おとながひとりでも多くかかわる状況をつくっていくことは、部落問題や人権問題の日常的な学びへとつながっていく。子どもたちは、部落に生まれたことではなく、出会い、つながり、差別の現実と向き合いながらも生きる地域の人の生き方に触れることによって、その中で生きている自分を誇れるようになっていく。

また、子どもたちがおかれている状況や抱えさせられているしんどさとは何かを問い続け、丁寧に把握し、共有していくことが不可欠である。そのことを把握するためにも、子どもたちや地域をどのように見ているのか自分自身を問い直す必要がある。そして、子どもたちにかかわっている多くのおとなが自分にとっての反差別の生き方や経験を語り、地域に対する思いや「ここで生きる自分を好きになって欲しい」というメッセージを届けていく。子どもたちが、自分につながる親や地域の人の思いや願いを自分の中に落とし込んでいくことが、具体的に子どもを育てていくことにつながっていくことも確認したい。

部落差別や災害など自分のおかれている状況と、どのように向き合い、どう乗り越えたか。2日間をとおして、報告者や参加者が自分を語り合うことができた。

私たちは、地域や学校、行政の中で、「自分を問い直す」「自分を語る」場をつくらうとしているか。自分を問い直し、自分の生き方や経験を語り合うことで関係を築こうとしているか。子ども会活動や識字教室、啓発活動、学習活動などの取組の中で学び、自分の生き方に結びつけられているか、改めて問い直したい。そして、それらの取組をとおして、人が育ち、子どもが育ち、地域に根付いて生きていく、人とひとがつながっていくことが、まちをつくることへとつながっていくことを、確認するとともに、私たちの学びにつなげたい。

## 第4分科会 第3分散会

### 討議の概要

九州・四国・中国・近畿・中部・関東からそれぞれ一本ずつの報告があった。被差別の当事者や厳しい環境におかれている人たちの実態の中にこそ、人権確立のまちづくりの課題があり、その課題を乗り越えるためには、「居場所（集まれる場所）」、「ネットワーク（顔の見えるつながり）」と「チームワーク（役割分担と協働）」が必要である。そこでの出会いをとおして、「学ぶことでつながり、つながることによってさらに学ぶ。」つまり、「人権確立のまちづくり」とは、さまざまな人たちが同じ時間と場所の中で自分や自分のくらしを見つめる学びをとおして課題を共有し、社会参画しながら自己実現をしていく営みであるということに参加する人たちが実感できるようにということを確認しながら討議を進めた。

愛媛から、「大勢の中で私は孤独だった」という報告者。自分の大好きなダンスを思うようにできないまま、誰にも頼れないままおとなになった。しかし、どんな子どもにも楽しくダンスを教える先生と出会って「どうしたら踊れるようになりますか？」やっとな他人に甘えることができた一言。自分のことをしっかりわかってくれる人と出会えたことで人への信頼を取り戻します。そして、ダンス教室をとおして子どもたちが持っている能力を十分に発揮できる社会をつくるための主体者になろうとする姿がたくさんの人を引き寄せ、集い、語ることで地域の人たちが元気になる場になっている様子が語られた。

地域の学校と支援学校の選択についての質問に、「学校は本人が選ぶ権利がある、どちらも選択できるようになってほしい。」と話した報告者。もしかしたら本人も気づけていないこと（障がいや生まれや育ち）にどう気づくのか、子どもたちの困っていることに、われわれおとなが気付く力をつけなければいけない。という意見があった。

島根から、ハンセン病問題についてまったく知らない、知ろうともしないで過ごしてきた報告者。行政に勤めることでハンセン病問題と出会い直し、自分の想像力がたりなかったことを社会にある差別性に重ね、差別を生み出している社会を構成する、自分はそのうちの一人であることを自覚していきます。そして、その差別をなくしていくためには自分が変わることが必要であると、当事者であるAさんに学び、関わりを深めながらつながっていきます。そんな報告者の姿にAさんが少しずつ心を開いていく様子やいつの日か必ずAさんに「おかえりなさい」を届けるために本気で啓発が続けられている報告。

自分を差し出しながら、当事者意識をもって本気で取り組む姿に会場からはたくさんの意見が出された。その中で、自分も啓発していく中で、本当のことを知ることで自分

自身が変わることが大切だと思っている。子どもから、父ちゃんこの頃少し変わったなあって言われる。学んだことが自分の家族に向けられていく、そうやってだんだん広がっていくことが大事だ。という意見は、人権確立のまちづくりに一番必要な好循環の始まりであるということが討議の中で確認された。

朝ごはんを食べられずにいる。でも、それを「しょうがない」で終わるのではなく、「自分たちに何かできることを」という地域のおとなたちの子どもたちを自己実現へと導こうとする思いが「朝弁・朝勉」という具体的な取組に結びつき、子どもたちが元気になることで地域のおとなも元気になっている様子が語られた福岡からの報告。

学習と基本的な生活習慣が定着し、やがて自分でご飯を作ることができる、生きていく力をつけられる。また、卒業していった子どもたちが地域のおとなになって、次世代との関わりが続くようにという願いを込めて、地域のおとなたちが知恵や力を合わせて子どもの育ちを見守り、育てるという実践は、人権のまちづくりに外せない、厳しい状況におかれているすべての子どもたちにスポットをあてる、「子どもの育ちを保障する」しくみを創るための道しるべとなった。

兵庫からは、外国にルーツを持つ子どもたちにとって「コッキリの会」は楽しく集える場所。中でも、民族名で参加できるサマーキャンプは生きづらさを感じさせられながら暮らしてきた人たちにとって、思いや悩みを本音で語ることができる場として大切にされてきた。そこに参加する人たちの思いや願いを、もっと多くの教職員に知ってもらいたい。そして、学校の中でも子どもが本音でつながることができるように、埋もれてしまいそうな課題を様々なネットワークを創り出すための活動をとおして克服していくとする取組。

自分の本当の名前で生きるのか、通称名で生きるのかはその人自身が選ぶこと。選べない社会の中に差別の現実があることは、すべての人権課題にあって、そうさせている、差別される側の問題にしてしまっていることに、差別を解消していくための課題があるのではないかと。激しさを増すヘイトスピーチ。その場に出会ってしまった子どもから、「あの人たちは私たちのことは知らないだろうけどとても怖かった。」と知らされる。そんな時に相談できる先生がいて、それを自分のクラスの子どもたちと一緒に考え、そして、それに立ち向かおうとする姿が差別を解消していくことになるのではないかと。

また、部落に生まれたから差別される。というのではなく、「差別する人がいるから部落差別があるんだ」。法が失効された後、部落差別がなくなったかというところではない。変わってきている状況の中で、今はどうなっているのか。問題がありながら報告されない、中身が薄くなってしまったのではないかと。解放運動や同和教育が目指してきたものは何だったのかを積極的に問題提起していったほしいという論議があった。

部落の人たち、教員の人たちが40年の間ずっと灯りを灯し続けて取り組んでこられ

た会館学習、今も学校総体の取組として脈々と実践されている。親の想いを受け学力保障と進路保障にこだわりながら会館学習に参加し続ける報告者。一人の教員としてAさんと関わる中で、将来自分の力で道を切り開いて行くことができるようになってほしい。そんな想いが、これからも教員と子どもがともに学びともに成長していくことができる会館学習の灯りを絶やさず続けていこうとする新潟からの報告。

Aさんに対して、周りの子どもたちやAさん自身からの「なんで」というつぶやきは聞こえてこなかったのか？学校の先生たちは子どもたちの核心に迫れているのか？自分のことをきちんと知らないまま、知らされないまま過ごしているかもしれない子どもたちに、おとながどんなふうに関わりを持っていくのか？本当のことを知らせていくのか？自らの課題として取り組んでいくことが大切だということを中心に討論が行われた。

埼玉からは、厳しい差別の現実の中、先人たちの熱い思いで建てられた教育集会所。その想いを受け、いまだ地域にある差別意識にきちんと向かい合い、活動を続ける報告者。周りが変わらないのなら自分が変わっていくことだと気づき、様々な人が集い、仲良しになれる場所を目指して活動を続けることで、居場所を失ってしまった人たちも集うようになった。その交流をとおして自分や地域の人たちの変容が報告された。

何のために学習するのか？被差別当事者だけではなくて、自分のことを知る、本当のことを知るという取組が必要である。知ろうとしないこと、知らせようとしないということは差別であることを意識してこれから取り組んでいく必要がある。そのために、どのようにして地域の中で、交流できる場を創りだしていくのか討議された。

## 今後の課題

広い地域からそれぞれの人権課題を解決するための取組が報告される中で、本当のことを知るができる場所や人に出会うことで、自分が変わり、そのことで身近にいる家族やなかまとのつながりが深まることが、社会にある差別に対応できる一人ひとりの感性を養い、人権確立を目指すまちづくりの取組を持続可能にする循環であることが教訓となった。

また、これまで行われてきた手法や範囲だけでは不十分であることを理解し、課題としながら取組まれている方々の参加が年々増えてきていることが実感された大会であった。そんな今だからこそ、柔軟に活動の交流を広げて、いろんな人と出会い語ること。その実践をとおして、色んな角度から人権課題の解決に結び付けられるための地域の教育力を高めることができるように討議を深めていくことが必要。

## 第4分科会 第4分散会

本分散会では、誰も排除されず、誰にも居場所や役割があり、学ぶ事につながり、つながることで学ぶこと、そして学んだことをまちづくりに生かすことを大切にしながら実践の交流をした。それぞれの地で同和教育・人権教育の取り組みが、ますます広がり、新たな「人権確立をめざすまちづくり」の実践に繋がっていくことをめざして討議が行われた。

### 1. 討議の概要

どのレポートにも共通するのは、居場所づくり、出会いから学び、つながりから変容があることや、継続して粘り強く取り組まれている点だった。事実に基づき実践を積み重ねることを通して差別をなくす主体者となり、周りの人とのつながりを確かなものにしてきている。

鳥取の報告は、人権文化学習会という居場所づくりから始まった。その中で「願児我<sup>がんじが</sup>ら<sup>ら</sup>め<sup>め</sup>」との出会いがハンセン病問題の学習につながった。地元の回復者である加賀田さんとの出会いがあり、町民集会を開催する。反対意見もある中、親戚の人一軒一軒回って話し込み、親戚の人も集会に参加していった。丁寧な話し込みをすることで、今までの認識を肯定的に変える町中を巻き込んでの取り組みだった。さらに、「時の響きて」の絵本作りをすることでも、さらなるつながりと広がりを作っていく、継続して17年間確実に歩み続けている。

新潟の佐渡の報告では、同和教育がほとんど根づいていない佐渡の中で差別事件をきっかけに、部落差別をなくしたい思いで立ち上がっていくが、周りにはなかなかつながる人がなかった。今回佐渡からの報告することで全国に同じ思いの仲間がいることを確認できた。今一步を踏み出した報告者が、佐渡の同和教育を推進していき、差別をなくしていく取り組みをしようとしている。討議の中で科学的根拠を基に事実の認識をすることや、障がいや病気などに対するマイナスイメージを持っていることを私たち自身が真摯に問い直すことが大切である事が確認できた。

長野の報告では、Tさんが40年間続けてきた研究会があった。一つの中学校区にある小中学校3校教職員とPTAと、住民自治協議会で構成する「吉田地区人権同和教育研究会」である。Tさんと出会い、人権教育は命に学ぶ教育だと感じる。しかし部落との出会いで浮かぶのが、子どもではなく解放子ども会の中心になっていた母親の顔だった。しんどい子どもや親の暮らしを見ていた時にその子の顔が浮かぶ。今回の報告で自分自身の変化が出てきた。Tさんの「一を聞いたら十を知れ」、「教師が一番人権感覚



がない」という突き付けに対して、きちっとTさんに向き合っていこうとする報告者の姿があった。

東京の都立南葛飾高等学校定時制卒業生の会の報告は、卒業生の会のつくった演劇「親を知る」の取り組みだった。報告者が学生だった頃、「全入無退学処分」を基に教職員が親身になって関わってくれた。「自分の存在が認められている」と感じる事ができ差別問題を通して自分自身を見つめ直してきた。多くの教職員は「生徒は変わるものと信じて関わり」「生徒から学ぼう」としていた。1980年から学校改革の一環として「演劇」と「朝鮮語」の授業が設置されている。同和教育に取り組む教職員の異動や退職で学校が少しずつ変わり、卒業生の会にかかわる新卒業生も少なくなった。校長に活動への理解を訴えたり、文化祭へも参加して活動を知ってもらった。そんな中、演劇を通して南葛の同和教育は生徒にとって大事だということを明らかにすることで、在校生の演劇発表がより意義のあるものになるのではないかと考えた。「ここで踏み出さないと状況はかわらない」という強い思いがあった。脚本は、生徒だった時のこと、南葛で自分の生き方が変わるきっかけになったこと、今の生徒に伝えたいことを中心にした。演劇発表後、生徒の感想から、自分と親を重ねていたり、本当は学びたがっていることがわかった。現在も新たなシナリオを考えながら、学校との関係を築いている。

千葉の東葛からは、解放運動との出会いから文字を取り戻す中での、未来へ向けての同研の取り組みの報告があった。現在は、仕事も家庭も運動も楽しんでいる。初めは運動に否定的だったが、この運動は差別のことばかりじゃなく、学力が磨け、プラスになると感じた。学力のないときは、役所などで分からないことが聞けなかったが、今は聞けるようになる。福田村事件の慰霊碑建立にかかわり、同じ被差別部落の人間としての怒りが湧いた。13年前に子どもを中心にしてムラの人と教員が参加する東葛同和教育研究会を立ち上げる。そこで仲間が語る姿を見て、自分のことを話すようになる。部落の子には強く生きてほしいこと、孫が大きくなるまでには差別をなくしたいと願って力強く取り組みを進めている。東葛を中心とした学校や地域の仲間づくりがしっかりできている取り組みだった。

三重の報告では、「もっと早よから識字教室があったら、こんな辛い思いせんでもよかったのに」という識字教室の生徒さんの話があった。部落差別は許せないという思いをずっと持ちながら、一人のマンパワーで始まった取り組みだが、識字教室に集う地域や学校をはじめとしたたくさんの方々がつながりは、確実に広がりを見せている。粘り強く取り組むことが、否定的な人を肯定的に変え、人権のまちづくりの広がりをみせている。そのことが多くの人に勇気を与えている。

## 2. 教訓的なことから

ものごとを科学的に認識していこうということが、同和教育で大切にされ、科学的認識によりものごとの本質を正しくとらえていこうとすることの大切さを改めて確認できた。

障がいや病気などに対して、私たちの中のマイナスイメージを問い直すことが大切である。同和教育を進める中で、一人ひとりが自分自身の中の偏見や差別意識、差別性に気づくことが大事であり、自分を見つめ直すことで差別をなしていこうとする側に立つことが確認できる。

出会いを通して自分を問い直し、学び続けることで、少しずつ自分を変えることができることも確認できた。

仲間ができたなら取り組むのではなく、気づいた人が一人でもやろうとすることが大事だ。同じ思いの仲間が出てくることを信じて取り組むことで、新たな仲間がつながることに勇気づけられた。

## 3. 今後の課題

自分が部落とどのように出会い、そこから何が見えてきたか、何が問われてきたのか。その学びの中から、自分は何をしてきたのかを伝え広げていくことが大事である。

これから私たちはどう後継者をどう育てていくのかとの提起があった。自分の活動を身近な人に話すこと、分かってくれない人には、粘り強く語りかけることが大事である。

同和教育や人権確立のまちづくりの取り組みは、仕事や義務とするのではなく、私たち自身の生きざまこそを問い直すことが求められている。

## 第4分科会 第5分散会

信州発 すべての世代に向けて、和をもちながらの継承を。答申から50年の思いが込められた大会であった。

本分科会では部落問題をはじめとする様々な人権問題の解決をめざすまちづくり、地域づくりの課題を明らかにしながら討議が進められた。

本分科会では、参加者と6人の報告者がそれぞれの役割を自覚し、つながりと行動をもって継承していくことの大切さを報告され、参加者とともに心を傾けあい討論を重ねた。

「差別の現実は見えなくなっている。」というが、「確実に見えている。」という参加者の思いがある。様々な地域の現状や熱い行動を聞き、議論は続いた。

### 1. 報告及び質疑討論の概要

報告の要点をあげながら、分科会の内容をまとめる。

小児麻痺と、難聴を重複する障害のある報告者は同和教育・解放運動に出会って、様々な差別、とりわけ障がい者にある様々な問題にも気づいていく。知的障がい者である受刑者の支援活動に参加したり、部落問題にも出会い、社会に作られている枠組みに疑問を呈しつつ、ライフワークとしての解放運動を展開されている。会場は報告者の伝えようとする姿、聞き取ろうとする思いで静まり返っていた。障害者基本法の施行とともに、社会をどう改善していくか、それらの気づきが進むよう運動を展開していくと力強く語られた。語ることで力が湧き、共にいることで力をもらう。このつながりは行動として人権確立をめざすまちづくりのスタートではないだろうか。

この子に拘って社会への自立を支え切った高校の教諭の報告にも地域の集会所の指導員の大きな支えがあった。様々な人が知恵と心をあわせ、とにかく子どもたちの自立までもっていくことの大切さを確認した。

東京からの報告は同和教育に根差した教職員として姿があった。かつて勤務校での差別事件との出会いから同和教育に出会い地域の子ども会に参加していこうとするが、「あなたに何がわかる？」と子どもたちに突きつけられた。報告者は、仲間として認められなくとも、生き方として自分の姿勢をつらぬき解放運動に確実に身を置き続けた。行政の支えの弱い地域ではあったが、運動を続けてこられた報告者から熱い決意があふれていた。報告者の同僚が滋賀の高校教職員と同じように「その広がりとは点ではあるが、教職員の一人一人がその思いを受け継ぎ、地域とつながりこの会場に集っている。その一人が私です。」と発言し、確かな広がりや継承の姿をみた。加えて「今後も確かな方向性を持ち、子ども会に根差し、解放運動を共に進める教職員でありつづける。」と力強い発言があった。

愛媛や滋賀の報告は子ども会や地域集会所のことを、『学び続ける場』であり、『立場の自覚の支えになる場』『つながりあう場』であるとし、子ども会を「一生保障の安心」と言い換えた。

地域差はある、個人差もあるが、立場の自覚を保護者がさせていくというのは厳しい。安心の中で立場の自覚をしていくにも、行政、学校、保護者、地域が、「さあ、今だ。」その瞬間のためにこまめに連携しあい報告しあうことが必要だという意見が出された。加えて、あなたは、そして私たちは「一人ではない。」そのことの共有のために様々な組織や活動のつながり継承を進めていく必要があると結論づけた。

埼玉からの家庭内同和教育の報告。支部のお母ちゃんたちの力強さと本気で子どもたちの生活を切り開いてやりたい想いに心が打たれた。

また、「今、自分がいるのは子ども会があったから。」「指導員の先生方がいて地域の仲間がいたから不幸だと思っていた自分がこの地域に生まれてよかったとさえ思える大人に育っていった。」と語る中で、これからはその環境や活動形態は確実に厳しくなっていくだろうけれど、差別がある限り子ども会活動を続けていくと決意を新たにしました。その中で、子ども会活動の学力保障について、対象をどうとらえるかについても議論された。部落の子どもだけを学習会の対象にしている地域もあれば、部落解放の視点や目的を了解されたうえで、共に部落問題を学ぶ仲間として学力をつけ進路を切り開かせていきたい。など地域差があった。地域、子ども会、行政、学校とのつながりが、個人としてどう行動につながられていくかとの討議課題に参加者のそれぞれの取り組みを語り共有することができた。

論議の中で意識調査をすると、20代の部落問題に関する意識の落ち込みがあることについてその原因や課題分析をこそしていくことが大切であると意見が出された。これについては今後も追跡していくことが確認された。

長野現地からの報告は命のたすき駅伝、この一人の命は差別に抗うことの強さや、仲間の支えについて、そして伝え続けることの意義、立場性などを考えさせられる報告であった。子ども会の歌を流しながら仲間の死を無駄にしないと走り続ける子どもたちに、教員たちがどういう気持ちで、立場で参加をしているのか？そのことを問いながら教員生活を続け、これからもかかわり続けると宣言された。

## 2. 今後の課題とまとめ

立場の自覚やカムアウトについてについて議論が及んだ。自覚は絶対に必要である。その意見の裏にはそのことで意欲や学びは高まる。しかしその一方で手法や、状況、時期が非常に繊細で緊張を伴う。

子どもの状況を見て、いかにベストなタイミングで行われるかということについてその場が地域なのか、学校なのか、家庭なのか、結局は子どもの状況を見て、どうかかわっていかうとするかが大事であるのではないか。学校や地域の連携は不可欠であると結論付けられた。討議の柱ともなっている人権のまちづくりには、人づくりは不可欠であるがその前に行政の基盤がますます重要になってくる。そして、解放運動の流れをくむ組織づくりの継承、改革も重要である。そのうえで、人づくりが地域の教育力の成功のカギを握ることが討議の流れの中で浮き彫りになった。

会場の参加者はそれぞれの立場でそれぞれの地域に帰り人権のまちづくりに主体者として立ち続けようと共感され第5分科会として一体化し、連帯の空気で締めくくられた。

## 第4分科会 第6分散会

### 1. 基調提案

分科会テーマである、人権確立を目指すまちづくりにつなげるために、団体が、組織が、個人が何をしたかを論じるのではなく、そのためにどのように人がつながり、そのつながりを深め、あるいは見つめて、何を次世代につなげていくのかについて話し合いたい。

本分科会では「一人一人の未来につなげることができるように、提示されるレポートから討議を深めること」を基調提案としてスタートした。

### 2. 報告の概要と討議

一本目の報告は、会場にもなっていた長野県須坂市から、地域の取り組みと位置づけられてきた、行政の取り組み、教育現場での取り組み、そして子どもたちと歩むPTAとして、学・社連携の報告があった。「新潟での識字活動の取り組みにあたり30年前にこの須坂市に学んだ」との発言を受けて、継続した取り組みが、それぞれの地域で新たな形で歩みをつなげてきていたことがわかった。

その新潟県からは、「差別事件の教材化～地元の部落の人の思いを受け止めて～」として

報告者が、部落差別の存在を明らかにした新潟県の差別事象を、教材にと託された。自分に出来るかと戸惑いを感じながらも、差別者の意識は身近にあると考え、中学校の生徒たちと議論を続けていく。

差別事象を通し、自分たちは何を知るのか。目の前の部落差別をどう自覚するのかを、繰り返し生徒たちに問い、報告者自身が生徒たちとの出会い直しをしていくという報告を受けた。そこには、家族の立場を明らかにしてでも資料を教材として提示して下さった人の存在があった。

討議の中では、自分自身の取り組みが、「差別はいけない」と言わせていた授業をしていたなど、自分自身を振り返る発言があり、「差別事象の教材を使うときに、自分たちはどのような立場に立つかを見極めていきたい」「生まれた場所に来にくいようにはしたくない」「差別があるのにないことになっている現状が辛い」という今ある課題が出された。

その課題にどう向き合っていけるか、次世代にどうつなげていくかを考えることこそが、人権のまちづくりではないかと提案した。

その後地元の方から、「PTAの役員として学習をただけの自分だが、自分の職場

の中で、出自を明らかにした若い同僚が、そのことで今までの関係は変わらないと言った私たちの言葉で、『言ってくれた』と言って、泣きながらみんなで一緒にアイスクリームを食べた」という発言をいただき、知ること、学習することの意義を確認した。

また、「ここで発言しようと思ってきたわけではないが」と前置きし、「自分ならばと語れるこの場所こそが、この研究大会ではないか」という発言もあり、地域によって啓発や取り組みが進んでいるとか、遅れているとかを視点に話すのではなく、この場は、個々人が、出された報告を自分に引き寄せて考えることのできる場所であることを共有して一日目を終えた。

2日目の最初に、「差別をなくし許さないという社会的立場」をこの分科会での共通理解とし、社会的立場を自覚するのは誰であるか、また、人権のまちづくりを進めるためには何が必要かを参加者とともに考えたい」とフロアに投げかけて、3本目の報告に入った。

千葉県から「繋げていきたい確かなもの・大切な思い～祖母から母へ 母から私へ、私から子どもたち、孫たちへ～」

祖母と母が歩んだ解放運動の歩みを、報告者本人は、40代になって初めて知る。それまで、自分を語ることはせずに生きてきたが、祖母、母の生きざまに触れ、自分自身の被差別体験を子どもや孫にさせたくない、推進教員の支えで「学習会」を企画し、そのつながりを大切にしてきた。そういうなかで育った娘さんが、「自分の部落を恥ずかしいと思うことはない」と宣言し、その後孫に恵まれ3代そろって地域を誇りに思いながら生きるという報告をしていただいた。

今、学習会活動や、子ども会活動が減りつつある中で、子どもたちがどのような出会いをし、どのように生き方につなげていくか、不安を持ち悩む人がいるという意見があった。

前段の報告に重ねて、4本目の報告は、三重県の「ずっと住みたいまちをめざして～子どもたちの未来のために～」

混住地区である当地区で、若者の流出で高齢化が進む中、市営住宅を中心に地域活動をしている。自分がうけたような悲しい被差別体験を繰り返したくないという思いでの活動であり、子どもたちとの踊りを通して、周辺住民も巻き込んで、啓発につなげたいというもの。

いま、関わる人を信じ、その人たちに支えられ、一人ではない実感を得ながら活動を続けている。

討議では、活動の源になっている「自分の経験と子どもたちへの思い」とは何かについて問われ、被差別体験を語り、そんな自分を「僕を人として扱ってくれた」「僕自身

を知ってくれている」と、「人との出会いやかかわりがある。」と答えた報告者。人とかかわりが人を解放させ、人は変わっていったと語った。

5本目には、大阪市のNPO団体「子どもと学校を支える地域の教育力をめざして」アンケートにより、同和地区を気にする人が増えたことが分かる結果の中、老若男女、障害者も、健常者も安心して住み続けられるまちづくりをどのように進めていくかが課題であると語った。長年にわたる取り組みにより、地域にある様々な課題を関係機関と連携して対応するネットワークを大切にしている。

生活困難な環境にある子どもたちの7割は地区外のこどもたち。そういった子ども一人一人を取り残さない居場所づくりをしているが、抱える課題が多岐にわたり、部落や、差別のことをどのように伝えていくのが課題ということも報告の中にあった。

この分科会では、4本が部落問題を中心に据えた報告であった。社会の変革の中で、確かにある差別の現実が見えていないように扱われているという発言があった。「差別の現実から学ぶ」「見ようとしなければ見えない差別」という言葉が、古く新しいと思わせる発言が続く。さらに、参加者が自分自身を振り返り、どのような人に出会い、どんな思いを持ったか、そのきっかけ、今後どうしていきたいかを語り出した。まさに、これまでの部落解放の取り組みが参加者一人一人にとっての居場所づくりとなっていることに気づかされた。

### 3、総括

本日の柱である、「人権確立をするまちづくり」とは、これまでの同和教育の積み重ねが大きく「もっと語りたい」を増やしていくところにある。

そしてつながりを作るとは、差別が今ここにある現実にもどのように出会い、どのように立ち向かってきたかを語り繋いでいく、人と人とのつながりであること。日々揺れ動く自分自身を主語にして語る事が大切。その中で、自分には何が出来るかを問い返す自分でありたい。

「今日も机にあの子がいない」からのスタートであった教育が、なくなりそうになってもまた、（必要とされ）作られていくのかもしれない。ただ、これからは、今までの営みを大切にしたいうえで、新たな声を足していける、次につないでいける、各地に広げていける一人になりたいと結んだ。